

## 多文化主義とデモクラシー (講演要旨)

辻 康夫

多文化主義とは、文化的・民族的マイノリティの文化・コミュニティを尊重支援しつつ、これらを全体社会へ統合するビジョンである。グローバル化が進むなかで、日本でも「多文化主義」の必要が語られるようになった。

近代国家は「国民国家 nation state」としての自己理解を持ち、国家と民族の単位が一致し、「国民文化」が全員に共有されることを想定している。近代国家の形成過程では、諸民族が国家形成をめざす力学と、国家が中央集権を進めながら、国民文化を形成する力学が合わさって、「国民国家」が形成されたのである。ところが、このプロセスは常に不完全であり、いずれの国家においても、国内に文化的・民族的マイノリティの集団が存在する。典型的なものは、地域的・言語的マイノリティ、先住民、移民・難民である。

19世紀から20世紀初頭には、これらのマイノリティ集団に対して、主流派の文化を強要する同化政策が行われた。同化政策は、制度的差別と結びついており、主流派の文化を身につけていないとされるマイノリティは、政治参加や職業選択などの権利を制限された。

このような差別的な同化政策は、第二次世界大戦後に、転換を迫られる。国際的に確立された人権規範は、民族差別を容認しなくなった。またアメリカ黒人の公民権運動など、平等を求めるマイノリティの運動が各地に広がった。

同化政策に代わるビジョンには、二つが考えられる。第一は、「カラーブラインド政策」である。これは政府や公的制度が、諸集団の間で中立を保ち、それらのいずれをも優遇しないという方針である。しかしながら、この方針のみでは、マイノリティへの処遇に不十分なこともある。中立にみえる社会制度が、主流派の文化を反映していることは多い。また、マイノリティへの差別が、社会の中に構造化されてしまっている場合、これが自然に消滅するとは限らない。このため、より積極的に不平等の是正に取り組む「多文化主義」の政策が必要になるのである。

多文化主義政策の第一の要素は、文化的ニーズへの配慮である。主流派の文化の中でマイノリティ文化の実践が制約されている場合、制度を中立化したり、制度の適用を免除したりする対応が行われる。第二の要素は、マイノリティに対する差別・偏見の除去である。マイノリティ集団に対しては、偏見が向けられ、これを根拠に差別的処遇が行われやすい。このような差別の是正のために、シンボリックな承認、ナショナル・シンボル、歴史解釈の見直し、差別やヘイトクライムの禁止などが行われる。

多文化主義政策の実践には、お互いのニーズをすり合わせ、新たな規範を作り出すために、対話を通じたデモクラシーの実践が重要になる。以下では、この点に注意しながら、日本の課題について考えてみたい。今日、日本では多文化主義政策を必要とする環境が生まれている。第一に、経済的活動のグローバル化への対応が急務になっている。日本政府は、少子高

齡化や、ビジネスのグローバル化に対応するために、高技能の外国人労働者の誘致を不可欠と考え、彼らが生活しやすい環境を整備する必要を強調している。また、最近では ESG 投資を引き付けるために、企業組織がマイノリティを包摂する必要も高まっている。また「先住民族の権利に関する国連宣言」にみられるように、グローバルな人権規範の強まりの中で、アイヌ民族に対する政策も展開されている。

以上の状況にもかかわらず、諸国と比較した場合、日本の政策の遅れは依然として大きい。今後、マイノリティとの共生を進めるために、重要な点をあげておきたい。第一に、マイノリティに対して、対等な地位の保障を重視すべきである。他国と比較した場合、日本では、マイノリティへの差別を抑止する施策が遅れている。ヘイトスピーチや、職場での不当な処遇は深刻な問題であるが、これらを救済する方策が脆弱である。また、日本の政策は、マイノリティに対する権利付与ではなく、行政による配慮が中心であり、マイノリティが権利主張を行いにくい構造になっている。

第二に、歴史の重要性を認識する必要がある。マイノリティがかかえる困難を評価するにあたり、その由来を理解することは不可欠である。たとえば、先住民文化の衰退が、自発的に起こったことなのか、それとも、強制的な同化の帰結なのか。そのどちらであるかによって、必用とされる政策のあり方は左右される。歴史を知ることが、マイノリティの願望の意味や切実さを理解するためにも不可欠である。さらに、過去に行われた不正義についての対処が、信頼関係の構築に不可欠なこともある。逆に、歴史の忘却は、未来の関係構築を妨げる危険がある。

マイノリティとの関係を論じるにあたっては、将来への不安や、ナショナルなプライドなどが交錯し、手堅い議論が妨げられることが多い。多文化主義にもとづくデモクラシーの実践のうえで、正確な知識、広い視野を養うことが、何よりも重要である。